エイト海賊団と麦わらの一味

庭園の野兎

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ハチマン達が、ソウブを出てからの冒険の話

目次

設定 ―― 1
プロローグ ―― 5

設定

船長ヒキガヤ　ハチマン（１９歳）懸賞金６億２０００万ベリー
能力「ケシケシの実」　通称イレイサー
あらゆるものを消すことができ、時間の概念を消すことで一生歳を取らないようにすることもできる。また、距離の概念を消すことで擬似的にワープのようなこともできる。ここまでいうとわかっている人もいると思うが悪魔の実の能力を消すこともできる（消された相手は、１０時間後には能力を使えるようになる）
能力と体術を用いて戦う、能力で相手の能力や、剣を消して近距離で戦う。
出身はグランドラインソウブの生まれ、ユキノたちは、小さい頃からの幼馴染みのようなもので、海に出る時も当たり前のように一緒に海へ出た。
仲間を守ることにおいては自分のことより優先する節があるため、ユキノたちも守られるだけの存在になりたくないという意志があった為、メキメキと実力をつける。
航海士兼料理人ユキノシタ　ユキノ（１９歳）懸賞金２億６０００万ベリー
能力「ヒトヒトの実モデル雪女」　通称氷の女王
実の名の通り雪女になることができる能力、ユキユキの実の上位互換一度凍らされる

と、ユキノが、解除しないと氷が溶けない。
ソウブを、出て海に出てからハチマンに、助けられてばかりだったので力をつける途中でヒトヒトの実を見つける。
戦闘員ユイガハマ　ユイ（１９歳）懸賞金１億８０００万ベリー
能力なし　通称黒鬼
悪魔の実は、食べていないが、昔から武術をやっていたので拳での戦闘が得意、海に出たばかりの頃は、あまり前に出て戦うことが出来なかったが、武装色の覇気にかなりの適性があったため、全身を武装色で固めて戦う。
船医イッシキ　イロハ（１８歳）懸賞金７０００万ベリー
能力「キュアキュアの実」通称アイドル
悪魔の実的には、回復系の能力相手の体を一日前の状態に戻す、ただし一日一度までしか使えない。武器は、銃で遠距離からの支援を行う、銃に能力を載せることで、相手の体力を減らす（相手からすると、急に疲れるような感じがする）
アジト待機メンバー
狙撃手カワサキ　サキ（１９歳）懸賞金１億２０００万ベリー
見聞色の覇気に長けている為、周囲の把握能力が高いが、遠距離の銃の方が得意なので近距離が全くといって良いほどできない。なので、よくイッシキと一緒に後方支援に

当たることが多い。
非戦闘員ヒキガヤ　コマチ（１６歳）懸賞金０ベリー
常にアジトにいて、アジトの掃除や管理をしている
トツカ　サイカ（１９歳）
コマチと共に常にアジトにいる、実力は、ハヤマより弱い程度と戦えるのだが、自分から、戦うというタイプではなく、守るために戦うという感じなので、アジトにもしも侵入者が現れた時のために残っている。
研究員ザイモクザ　ヨシテル（１９歳）
アジトの改良や、武器の整備を行う
リーフ海賊団
エイト海賊団と協定を結んでいて、どちらかが必ずアジトにどちらかが居る。
船長ハヤマ　ハヤト（１９歳）懸賞金３億４０００万ベリー　通称紳士
剣メインで戦う、剣の腕は中将クラスとは対等に戦えるくらい
航海士ミウラ　ユミコ（１９歳）懸賞金１億５０００万ベリー　通称マザー
体術を用いて戦う、ユイほど、武装色か得意ではなく、見聞色で避けながら戦う。
狙撃手トベ　カケル（１９歳）懸賞金２億１０００万ベリー　通称銃師
射撃の腕がよく、１．５メートル級の巨大なライフルで戦う、近距離まで詰められる

と、腰の2丁銃で戦う。

船医エビナ　ヒナ（１９歳）懸賞金４０００万ベリー　通称なし

イッシキのような能力はないが、船医としての腕は一流

船「カッツ号」（エイト海賊団）

ソウブを、出るときにユキノシタの親からもらった船

船「リーフ号」

海へ出るときに、ハヤマが親からもらった船

アジト「マックス島」

初めて、ハチマン達が拠点にしたところ、航海を始めてから、3年以上ここをアジトにしている普段は、ケシケシの実の能力で認識を消して、ユキノシタの能力で周囲に雪を降らしている。ハヤマ達が入る時は、電電虫で事前に知らせる

プロローグ

ーーシャボンディ諸島ーー
２３番グローブ
「やっと着きましたね～」
「本当にここまで来るの長いから好きじゃないんだよなぁ」
「でも私たちだけで行かせてくれないあたり、優しいのよね、うちの引きこもり谷くんは、」
「しょうがねぇだろ、ここでお前らだけ行かそうとするとコマチに、何言われるか分かったもんじゃないしな」
「まぁ、そんなことより早く行きましょ！」
「そうだよユキノン早く行こ？」
ーー物陰ーー
「こちら海軍駐屯地２３番グローブ支部、エイト海賊団と思しき人たちを発見！」
ーー海軍本部ーー
「エイト海賊団か…、あいつらも、大分有名になったものだな」

「そうだな！あいつらは、民間人への被害報告は今のところ無いし、放っといても良いんじゃないか？」
「そうだな、しばらくは放っておくか」
「「至急」」
「カルメラ聖がシャボンディ諸島に、いるという情報が入りました！」
「何！ガープ、もしかするとお前に行ってもらうことになるかも知れんぞ」
「あいつの一味は可愛いのが多いからな！」
「ハチマンだけは怒らせてはいけない、元々あいつの懸賞金はハチマンの逆鱗に触れた上層部が、危険度からつけたものだからな」
「あいつの前では何もかも無力になるということしか、分かっていることもないし…」
ーーシャボンディ諸島ーー
「船長、これどっちがいいと思います？」
「どっちでも良いんじゃないか？」
「ヒッキー少しは、考えなよ…」
お前らは、何着ても似合うから一緒に居ると、周囲からすごい目で見られるんだよな、可愛いし」（重要なことなので二回言った
「ヒキガヤ君、嬉しいのだけど、あまりこういうところで言うんじゃなくて戻ってから

言ってくれないかしら」／／／
「船長／／／」
「ヒッキー／／／」
「え、俺またなんかやっちゃった？」
　ｓｉｄｅ店員
「この人これ、素で言ってんのかよ」
　ｓｉｄｅハチマン達
「荷物貸せよ」
「はい」
「ん、」
　そう言って、ハチマンは能力で買ったものを船に送った
「何回見ても凄いですよね」
「あたしも、みんなみたいに何か能力欲しいな～」
「ユイガハマさんの場合、近距離系の能力がいいかしらね」
「うん、なんかパンチとか強くなる能力無いかなぁ」
「「おぉ～、可愛い娘達がいるえぇ～!!」」
「ちっ、天竜人かよ」

「「貴様達を第１６夫人、第１７夫人、第１８夫人にしてやるえぇ～」」
「結構よ！」「いやです！」「嫌に決まってんじゃん」
「「海軍あいつらを捕まえるえぇ～」」
　そう言われ、海軍達は周囲を取り囲む
「海軍それ以上、近づくなら地獄に足を踏み入れたと思うんだな」
「カルメラ聖こいつらはやめませんか」青雉はそう聞くが…
「「なんだ、海軍大将が反論するのかえぇ～」」
「分かりましたよ、やればいいんでしょう、こちらシャボンディ諸島青雉、カルメラ聖の意見により、エイト海賊団の捕縛を開始します、至急増援をお願いします」
　ーー海軍本部ーー
「大将青雉からの伝令、エイト海賊団を、捕縛するので増援を頼むとのことです」
「怒って欲しくないことが怒ってしまったか…」
「ガープ貴様が指揮をとって、シャボンディ諸島に向かえ」
「わしとしても、あいつとはあまり戦いたくはないんじゃがなぁ」
　ーーシャボンディ諸島ーー
「お前らは、常に固まって動けよ、半分は俺がやる」
「あまり、お前らとはやりたくないんだよなぁ、俺ほぼ役立たずだし」

「大将！どう言う意味ですか？」
「あの男の能力は、相手の能力を一定期間消せるんだよ」
「な!?」
「ユキノシタ、能力を使って逃げるぞ」
「分かったわ、『スノーロード』」
ユキノシタの能力で周囲を凍らせてから、雪の道を作りあげる
「あらら、厄介なことしてくれんなぁ」
「今だ、逃げるぞ」
「「はい」」
ｓｉｄｅガープ
「センゴク、青雉からの連絡で、青雉が能力を消され、逃げられたそうじゃけど、どうする？」
「このままだと天竜人が、何を言ってくるか分からん、ガープも青雉と合流しろ、エイト海賊団はどうにか探してみる」
「至急！シャボンディ諸島に暇な兵士達を向かわせろ」
ｓｉｄｅハチマン
「なんとか撒いたようだな」

「ここがシャボンディ諸島か～！」
「あいつらは、」
「麦わらの一味、船長はモンキーＤルフィ懸賞金は３億ベリー、最悪の世代の子ね」
　そう話していると、ルフィが、こちらの方に来て
「お前らここの美味い飯の場所とか知らねぇか？」
「ルフィ先に行かないでよ」
　なんか露出が多くないか」
「エロ谷くん、鼻の下が伸びてるわよ」
「ヒッキーキモい」
「船長、ああいうのが見たいなら私に言ってくれれば良いのに」
「いや別にそういうこと考えてるわけじゃねぇよ」
　本当だよ、ハチマン嘘つかない
「ルフィなんていう人達に声かけてんのよ！」
「俺らのこと知ってんのか？」
「エロ谷くん、あの件以降、私たちを知らない人の方が少ないことを知らないの？」
「知ってるに決まってるじゃない、ルフィこの男、ヒキガヤの懸賞金は６億ベリーを、超えるのよ！」

「6億ってことは俺の倍だな」
「まぁ、懸賞金＝強さじゃない、俺はそこまで強くないからな」
「船長何言ってるんですか、あの英雄ガープに勝っておいてそんな弱いなんて」
「お前、爺ちゃんに勝ってるのか～、凄えな俺なんか今でも全く歯が立たないのに」
「綺麗なお姉さん方、私は麦わら海賊団料理人サンジと申します。以後お見知り置きを」
「ヒキガヤ君あなたもこの人を少しは見習ったら？」
「こんなことやってる暇ねぇだろ、あと同じ海賊として、助言してやる、今ここには、大将青雉、英雄ガープ、俺らを探すための千人単位の海軍達がいるから、無用な問題を起こすんじゃねえぞ」
「助言ありがとな」
「何問題ない」
「よし、アジトに戻るか、食材買ってないけど、途中で買って帰ればいいだろ」
「そうね、変にこれ以上騒がれる前に帰りましょうか」